

# 勝利で実力に肉争「名札着用拒否」

## 日刊労働者 動力千葉

85. 7. 15

No. 1989

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）  
（鉄電）二九三五（六）（公衆）〇四七二（二二）七二〇七

闘いのみが活路を拓く

### 83名の闘いを教訓化し、生首切り攻撃と闘いぬこう

監理委の七月末答申をもって三人に一人の首切りを強行せんとする当局は、その突破口の攻撃として「名札」未着用を唯一の理由に「駅への助勤者」八三名を一方的に「助勤解除」という暴挙にうってでてきた。動力千葉は、攻撃の本質をじっくりと見すえ、当局の矛盾と弱点をつき、原則的かつ統一の闘いの展開で緒戦の勝利をかちとった。八三名が切り拓いた地平をさらに打ち固め、名札着用拒否・ワッペン闘争貫徹を出発点に「分割・民営化」！十万人首切り攻撃と徹底的に対決して闘いぬこうではないか。

#### 一歩踏みこみ、「活用策」で実力対決

反動中曽根内閣にとつて、「分割・民営化」十万人首切りを実現するための最大の障害物は国鉄労働運動にほかならない。当局は国鉄労働者を屈服させ、労働組合の団結を破壊し、侵略戦争へ動員するために、なりふりかまわぬ攻撃を加えてきている。

千葉局は、「過員」を口実とした「活用策」をもって組織分断・破壊攻撃を開始してきたが、動力千葉は客観情勢を見極めつつ、攻撃の本質を見ぬき、一歩踏みこんだたたかいとして「活用策」を取り組んできた。

これは、攻撃のすさまじさに屈服したうえで、「国鉄を守るため」「雇用を守るために」と称し、「三本柱クリアー」や「骨身を削る」運動により、当局に率先協力している動労「本部」革マルをのりこえ、あらゆる戦術を駆使した抵抗闘争の展開で、最大限の組合要求をかちとり、来るべき決戦にむけた組織力・団結力をつくりあげるたたかいなのである。

#### 勝利を切り拓いた83名の不屈の労働者魂

ところが、情勢に悪のりした当局は、八三名の「助勤者」（動労千葉四〇名、国労四三名）に名札着用を強制し、これを拒否した全員に「助勤解除」を一方的に強行するという暴挙にうってでてきた。

「名札着用拒否」は組織のもとに団結していることを示す最低限の証であり、敵しい情勢の中では、一人ひとりの労働者の意識的闘いによつてのみ可能なのだ。

当局は「名札を着ければ国鉄が再建できる」かのごとき破綻した論理や、「脅かせば屈する」式の硬直した姿勢で弾圧を加え、反撃にあうやぶ

りあげたユブシをおろすこともできず「助勤解除」を強行するとともに、元区に帰し、仕事をさせず「日勤扱い」という理不尽な攻撃を加えてきた。当然のこととして、八三名の怒りは爆発した。連日、各区において現場長に対する抗議・追及のたたかいが展開されたのだ。

「名札」をめぐる闘いは、本質的に労働者が勝利できる闘いである。われわれは、原則的かつ柔軟な取り組みにより、当局の弱点、矛盾をついて攻める闘いを展開してきた。こうした闘いによつて当局は内部混乱を拡大し、ついに「助勤者」を再度駅へ戻さざるを得ないところへ追いこまれたのだ。

しかも、われわれは「一交の宿泊場所を区とする」をはじめ、ほぼ組合要求を獲得する成果をかちとった。

#### 正しい路線と団結こそ勝利の道

これは国労共闘を軸とした、八三名の団結した闘いが切り拓いたものである。

八三名の若い仲間にとつて、当局との激突は初めての経験であり、一人ひとりが管理者の恫喝に屈せず、必死で闘いぬくことをとおして当局の本質をひきだし、労働者らしく闘うことの重要性をつかみ飛躍をかちとった。

いま求められていることは、労働組合のもとに団結し、統一した行動のもと、あらゆる抵抗闘争を組織することが生首切りを阻止する道であることを八三名の仲間の闘いを教訓化し、全組合員の共通の確認とすることである。

労働者が「名札」で屈服すれば、当局はカサにかかって攻めこんでくることは明らかなのだ。

どんなに苦しくとも、反動・中曽根内閣に怒りを燃やし、名札拒否！ワッペン闘争の強化をもつて反撃の闘いに決起しようではないか。